

第十章 何の意(こころ)ぞ 狂歌の客は

開元二十五(七二七)年夏。

手にした筆は止まったまま。気配に顔を上げると、妹の険しい視線がある。

「お兄様、これって、どうなさるのです。よもやと思いましたが、お招きに応じるのですか」。

張り詰めていたものがふっと緩み、妹に向かって微笑む。

「これかい。まだ書き始めたばかりだ。きつぱりお断りせよと、おまえは言いたいのかい。だったら、そう言ってくれていい」。

「ええ、言いますとも。筆を貸して下さい。あたしが直してさしあげます。

「ごちやごちや言わず、御遠慮しますだけで明瞭ではありませんか」。

「宰相までされたお方に、そんな手紙はいかにも不躰ではないかい」。

「もって回った書き方をはかえって失礼です。すばつと一言でいいではないですか」。

「物事には段取りというものがある。お断りするならなおさら鄭重でなければなるまい」。

「何が段取りですか。何が鄭重ですか。この前、あのときにすぐにお断りしていればすんでいたのです。無闇と盃を重ね、まともに話ができないまでに酩酊したのは何の真似だったのですか。お兄様は昔から阮籍を気取っていましたけど」。

「あのときは不覚にも酩酊し、礼を失したと反省している。近頃は滅法酒に弱くなった。酒浸りで娘の縁談をうやむやにした阮籍を真似たのではない」。

「あのときにお断りしないから、荊州からお招きを頂戴することになってしまったのでしよう。今度は、きつぱり決着を付けてしましましょう」。

妹は兄から筆を取り上げようとする。

「まあ、待ちなさい。おまえはどうして私が行こうとしていると決めつける

のかい」。

「見ればわかります。お兄様は、袋小路に飛び込む決意をしようとしているのでしよう。今日はここで見つけて、この前のように許しはしませんから」。

「そうやって睨み付けなくてもよいではないか」。

「心配しているのです。もう終わりにしてください。何回繰り返したら気がすむのですか。この際、きちんと勘定してみてはいかがですか」。

「何の勘定だい」。

「南園からふいと出て行った回数です。ついこの間だって、峨眉山に登るとかで出て行かれたばかりではありませんか。お体がすぐれないのに、峨眉山など行けるはずがないと思っていたら、案の定、途中でおかしなことになって、二十二郎さんにさんざん迷惑をかけたのでしよう。それでも懲りずに、次は荊州ですか。勘定すれば、よくまあこれだけ数を重ねて来たと、御自分でもきつと呆れ果てるでしょう。お兄様は、私なんかと比べたら、ずっと頭がおよろしいはずなのに、どうしておかしなことばかりするのでしよう。妙

な具合に頭が良すぎたのでしょうか。お姉様がいつもおっしゃっていましたが、考えるだけ変になるって。簡単な勘定だって、そのおつむでは心もとないのではありませんか」。

兄の頭巾を軽く押し、ふと窓より外に目を向け、

「おやまあ、どういう風の吹き回しでしょう、うってつけの二人が来たではないですか」。

妹は笑い出す。

「誰か来たのかい」。

「いま言った二十二郎さんと、それに郊君です。もしかして、お兄様がお呼びになったのですか。あたしに内緒で出て行く相談をしよう」と。

「いや、呼んでなどいない」。

「ここのところいつも二十二郎さんを連れ出していますけれど、二十二郎さんだって迷惑なのではないですか。二十二郎さんなしでは旅ができないのですか」。

「たぶんそうなのだろう」。

「毎度毎度お兄様の面倒をみさせられて、もう勘弁だと思っていてくれたらいいのだけど。郊君はきつと止めてくれます。あの二人を味方にしなくては。

お兄様にはきつと反省していただきます。覚悟して下さい」。

「お手柔らかに願おうではないか」。

二度目の上京は三年前の春だった。長安に着くと、丁鳳は試験に落ちていた。次回に備える意味もあって、丁鳳を様々な人に引き合わせ、張九齡とも会った。

都の知人は前回の数倍に増えた。人々の間を順に巡るうちに夏を過ぎ、秋を超えて冬になった。官職を得るための特別な運動はしなかった。張均のように、媚び諂いの詩を寄せるしかない人々がより大手を振るうようになっていた。その趨勢を改めたいとの思いが湧けば、釣り上げてほしいとの願いは

強まる。

滞在が年を越すばかりにまで長引いたのは、もう一つ、一筋の道を一步でもよいから前進したいとの思いがあったからだ。都に来て都の俊才と交わっても、南園にいるときと同じ心持ちでいられたのは、前回の上京と比べると大きな違いであった。しかし、それだけなら南園に留まっても同じだ。

南園から訃報が届いた。褚先生が亡くなった。俄かに後悔が生じた。褚先生の弟子として官職を就くのが最もよいと考えるのなら、なりふり構わぬまでに獵官運動をしておくべきであったろう。褚先生に最も愛された弟子としてその最期の日々寄り添うことに価値を置くのなら、上京は控えるべきであった。

都の門を出て、「二度とここには来ない」と子邕に言った。都での日々は、それと意識していた以上に心身に重い負荷であったのだらう、襄陽に帰る道で雪のために足踏みしたときに、体調を崩して先に進めなくなった。十日近く余分にかかって南園に辿り着き、孟四の死に遅れた。孟四は褚先生の亡骸

の前で正気を失い、幟を立て太鼓を叩いて昼夜をわかたず歩き、そのまま息絶えた。

孟四の死のありさまを聞くと、体の中で煮えたぎるものが渦を巻き、孟浩然是激しい背中痛みで倒れた。生死の境をさまよい、快方に向かったのは年が変わって春の半ばだった。

都から一通の手紙が届いた。韓朝宗（かん ちょうそう）からだ。韓朝宗は襄州刺史として赴任して以来、孟浩然と親交を深めていた。孟浩然の帰郷と入れ替わるようにして上京し、韓朝宗が都にいる間に、皇帝は、五品以上の者に対して、国にとって有意な才を有する者を一人ずつ推薦せよと命じた。韓朝宗は孟浩然を皇帝に推薦し、ただちに上京するならば官職に就ける公算が大であると孟浩然に知らせた。孟浩然是病を理由に行かなかつた。都とは決別していた。

韓朝宗は襄州に帰還すると、残念がりはしたが、詩を通じての付き合いは以前と変わらず続いた。

それから一年半ほど経った昨年の九月、韓朝宗は襄州刺史の任を解かれ、遠隔地へ左遷となった。暮れになると、張九齡が宰相の座を追われた。今年の四月、張九齡は都から追い出された。張九齡は新たな任地である荊州に向かう途中で襄州に立ち寄り、自分の幕府に來ないかと孟浩然を誘った。孟浩然はことさらに酩酊して返事をしなかった。張九齡は荊州に着くと、さらに誘いの手紙を送って來た。

孟郊は入って來るなり、

「叔母さまがいらしてちょうどよかったです。こちらの兄さんをこっぴどく叱っていただけませんか。急に變なことを言い出したので、叔父上に聞いていただこうと連れて來たのですけれど、叔母さまの方が効き目があるに違いないありません」。

「やれやれ、また一人増えるのですか。いまお兄様を叱っている最中だった

のです」。

「まさか、叔父上がまた何か思い立ったのですか。それは一大事です。こちらの兄さんなどはどうでもいいです」。

「それなら大助かりですな」。

孟篋は笑う。

妹は、

「どうでもよくはないのでしよう。一人も二人も同じ、この際、まとめて叱ってさしあげます。二十二郎さんは一体何を企んでいるのですか」。

孟篋はのんびりとした口調を作って、

「僕がですか。僕は、叱られないといけないような悪いことを、企んでいるのでしょうか。ごく当たり前のことをしようと思っただけです。でも、僕なんぞはどうでもいいのです」。

「どこが当たり前なのです。この兄さんには弱ります。南園の奇人として、一番にはならなくとも、二番か三番か四番かあるいは五番と言っているいいので

すから仕方ないのかも知れませんが。

「僕は平凡な男です。それでも、一番ではないとわざわざ断られて、五番にまで下げられるとあまりいい気はしません。ちなみに、一番というのは、訊かずとも決まっていますか。」

「そうそう」

と、妹は兄を見る。

「どうせ三人とも同じように思っているのだろう。それも仕方あるまい、この変に良すぎる頭があるからだ」。

孟浩然は自分の額をとんとんと叩く。

子盞は嘖き出し、

「良すぎる頭ですか。兄上は奇人を通り越しておかしくなってしまったのですかな」。

「良すぎると言ったのはあたしです。そうでなければ理解できませんでしょう。性懲りもなく何度も南園を出て、またなのです。もういい加減になさい、

勘定して御覧なさいと言っていたのです。お兄様の良すぎる頭では、簡単な勘定さえできないようなので、いい具合に來られたお二人にやってもらおうと思ったのです。でもその前に、これを開けてみてくれませんか。だって、本当は、あたしはこのために來たのですから」。

床に置いた籠から藁で包まれたものを取り出し、子甕に手渡す。

「藁をほぐしていいのですか」。

鮮やかに彩色され陶製の瓶が現れる。首を長く伸ばした鳥の形をしている。

「中身は何ですかな」。

耳元で振る。

「お兄様にと倅が送って寄越しました」。

子甕は瓶を軽く叩き、

「莫淵君なら、葡萄の美酒に違いありません。都で嘗めたことがあります。

ここにうちの親父さんがいなくてよかったです。この大ききの瓶なら、一人で全部呑んでしましましょう」。

「珍奇なお酒を送って来るからには、莫淵君は向こうで立派にお勤めをしているのだろう」。

孟浩然が言うと、妹はまんざらでもない顔で、

「そうだといいのですが」。

「手紙はなかったのかい」。

「この母を安心させようというのでしよう、いいことばかり書いてありました。お仕えるのはどなたも良い人で、西方の情勢はすこぶる安定し、自分さまことに健康で、何一つ心配はないと。あんまりいいことばかりなので、信用していいのか、かえって心配になります」。

「はるばる涼州からその荷や手紙が届いているのは、万事うまくいっている証ではないのかい」。

「お兄様に教わった剣のお蔭で、くよくよ悩むこともないと、そんなことまで書いてありました。お兄様への御挨拶のつもりでしょうけれど、信用してよいものやら。一つが疑わしければ、他も疑いたくなります」。

「その一つは疑わなくていいのではないのかい」。

と、孟浩然は笑う。

「お兄様からたった一回習っただけで、悩まずにすむようになったりするものですか」。

「剣はもとは雲表観主様の教えだ。莫淵君は、私からではなく、雲表観主様から何か教わるものがあり、ここで想像する以上に立派になっているのだから」。

孟郊は、

「私もそのように思います。皆様に囲まれ、南園の温和な風に包まれて生きる私と違い、莫淵さんは砂漠からの身を切る風に立ち向かって一人で生きておられるのです。どれだけ御立派になったかわかりません」。

「莫淵君のその勇ましい姿を思い描きつつ、この瓶を開けるとしませんか」。

孟郊は待ちきれないと言わんばかりに、小刀で膠を削り、首をぐいとひねる。

孟郊が鼻を寄せ、

「これが、噂に聞く葡萄のお酒の匂いですか」。

「玻璃の盃があればぴったり似合いますよ。六郎兄さんがどなたかに頂戴したものがあつたような気がします」。

孟邕は棚を物色して杯を取り出し、

「では、六郎兄さんからどうぞ」。

酒を注ぐと香りが一段と強まる。

孟浩然は口に含み、かつて都で飲んだものより味が濃いと感じる。良い品を莫淵は選んだのだろう。

「あちらに行つて何年になるかい。交替の時期にはならないのかい」。

「お役目が増えて、まだまだ帰れないようです」。

「いい働きをしているからだろう」。

「遠い土地には他に行く者がなくて、重玉がられているだけなのでしょう」。

「とりわけ辺境の地で仕事をきちんと果たしておけば、こちらに帰つてから

もい仕事がまわってくるだろう。そうなれば、おまえの家も安心だな。

妹に杯を回す。

「珍しいお酒など送って来なくても、元気でいてくれれば、それで十分です」。

妹は神妙な顔で飲み、次に孟邕に杯を渡そうとすると、

「郊君が先でしょう。こちらは南園の御主人様ですからな」。

横に押し付ける。実質的には孟郊がすでに南園の主と言っている。

孟郊は拒み切れずに飲み、

「あちらでは、これを好んで飲んでいるのですか。かなり変わった味がしますが」。

「最初は変だと感じるくらいの方が、後になるとかえってよくなるものでしょう。最初からすぐにいいと思えるようなものは、後になると大してよくはない。とりわけ人間はそうでしょう」。

そう言う孟邕に、孟郊は杯を回し、

「兄さんは、御自分について言いたいのではありませんか」。

「僕としては、後になるとますます変になるのが望ましいですな」。

「兄さんが望む通りこれ以上変になったら困ります」。

孟浩然は、

「それで、二十二郎君は何をしようとしているのかい」。

「僕ですか。僕のことなんか、まるつきり大したことありません。美酒の前では無粋な話は禁物といたしませんか。ここは、このお酒に心を集中させていすな」。

子盃は杯をじっと見据えて、おもむろに呑み乾す。

「これは実に結構。莫淵君は極上のもものを選んでのでしょう。この結構なお酒を頂いたからには、僻遠の地におられる莫淵君に、しばし思いを馳せるべきでありますよう」。

遠くを見る目ですと立ち上がり、顎に手を当て、しきりに考えるそぶりをしてつつ部屋の内を歩き、どんと胸を叩いて、詩を吟じ出す。

壮志吞鴻鵠

君の壮志は鴻鵠をも呑むばかりですが

遙心伴鶴 兄弟を想う情は遙かに君に伴います。

所従文与武 踏み行うもとは文と武です

不戦自応寧 戦わずして自ずから安らかなになるでしょう。

孟郊が笑う。

「兄さんが御自分の詩を披露してくださるのかと期待していたのに。送別の宴での叔父上の詩ではありませんか」。

「葡萄酒の美酒を讃える僕の詩はとづくにできています。でも、天下に名高き六郎兄さんの前ではどのような詩も霞んでしまいます。遠く莫淵君を思うには、六郎兄さんのこの詩を吟じる方が余程いいと咄嗟に思い返し、瞬時に詩を一字も間違わずに思い出したのは大したものだと思ってくれませんか。自慢するものではありませんが、六郎兄さんの詩なら、大抵のものはすらすらと口をついて出て来ます」。

「どうせ自慢したいのでしょうか。では、試しに吟じていただきましょうか」。そう言う孟郊の前に、孟鯨は瓶を突き出し、

「一篇の詩につきこれ一杯でどうですかな」。

「それは駄目です。貴重なお酒です。他の皆様にも御賞味ただかなくてはなりません」。

孟郊は瓶を取り上げてぐいと栓をする。

「まさかたった一口でもうおしまいですか。我が南園の主殿はしつかりしておられる。自分だけよければいいという考えはない。秩序というものを保つにはそうでなければならぬ。君のそういうところは嫌いでないどころか、大いに尊敬している」。

「兄さんに褒められると気色が悪い」。

「素直に受け止めてほしいですな」。

「兄さんはこれまで一度だって素直に話したことがない。いつも捻ってばかりです」。

「僕の素直さがわからないのは、君が素直ではないからでしょう」。

妹は二人のやりとりを止め、

「ではお酒は終わりで、お兄様に移りましょうか」。

「勘定ですか」。

「記憶の良さでは誰にも引けを取らぬこの僕が、我が南園が誇る六郎兄さんの一代記を正確無比に語るといたしましょうか」。

「二代記とは大袈裟な。回数を勘定するだけでいいのだろう」。

と、孟浩然が言うのを、妹は、

「二十二郎さんの好きに任せましょう。きっと面白く語ってくれましょうから」。

孟邕はむやみと咳払いをし、

「では、よろしいですか。さて皆様、ただいままでこの部屋には、西方万里の彼方よりもたらされた葡萄酒の美酒の甘き香りが充満しておりましたが、いまを去ること五十年ばかりの昔、年号で言うところの永昌の初めですが、後の李白様に『清芬』と称えられるようになりますところの良き香りが、大地の片隅より、そこはかとなく漂い出したのでございます。このとき、世の

中は悪しき匂いに覆われておりまして、世間の人々の鼻は、やむをえずその匂いに慣れてしまっていたのであります。ある風雨の強い晩でございました。さるところのさる仏寺に、寝ずに修行を続ける一人の僧がおりました。荒れ狂う嵐の音など一切耳に入らぬ様子で、いわゆる無念無想の境地であったのでしよう、微動だにせず座していたのであります。明け方近くになりまして、どうしたことでありましょうか、不意にですな、無念無想の境地がぷつりと切れ、我に戻りますと、あたりは物音ひとつない静けさ。嵐には乱されずとも、この静寂に返って心が乱れたのを僧は残念に思い、元の境地に戻ろうと努めました。ところが、一度開かれてしまった五感の窓は鎖し難く、耳は静寂を聴き、鼻は良き香りを感じ取ったのであります。振り払おうとすればするほど香りは強く、心に好ましく思う情が湧き、抵抗しようとして勝手に体が動き、我知らずに戸を開けて外に出たのであります。表に立ちますと、ようやく白み始めた空のもと、かの香りがよりはつきりと流れて来ているではありませんか。修行僧の体はもはや自分のものではなく、その香りへと激

しく引きつけられたのであります。かくて千里の旅に出て、ようよう到着しましたのは、北に峴山を仰ぎ、東に漢水を臨む南園とか呼ばれる土地でありました。これぞ香りが発せられる元と修行僧が突き止めたのは、南園老と呼ばれる老人に抱かれた光り輝く赤ん坊だったのであります」。

孟浩然是苦笑し、

「どこが正確無比なのかい。君のことだから、少々の作り話が出るのは仕方あるまいと思っはいたが、最初からこれではやりすぎではないかい」。

「そうですね。兄上の詩に習っただけです。実より離れてこそ真に近づくのです」。

「私の詩がかい」。

「六郎兄さんの詩なら口を突いて出て来ると申した証として、この詩などはいかがですかな」。

氛氳亘百里

香りは百里の先まで聞こえていまして

日入行始至

日の入る時分になつてようやく到着しました。

「湛上人様をお訪ねしたときの詩です。このときは百里の旅をしたのではありませんでしたし、山に着いたのは日が落ちるかなり前でした。湛上人様の徳が百里の先まで香るのなら、六郎兄さんの香りが千里の彼方に届いてもいいではありませんか」。

「誇張があるのはよしとしても、その修行僧が雲表門主様であったと言おうとしているのなら、辻褄が合わないと先に指摘しておこう。私が生まれたころはまだ雲表觀主様が襄陽に来ておられなかったのは確かな事実だ」。

「はあ、そうやって先回りされると話しづらいですな。ならば、修行僧が誰であったかはよしとして、とにもかくにも、南園老の胸元にいた赤ん坊はですな、当時の天下を塞いでいた悪しき匂いの中で、まことに特異な香りを発していたのであります。しかし、匂いというものはなかなか厄介でしてな、当人が隠そうとしても隠せるものではなく、他人には明々白々でも当人だけは気付かないということもありますな」。

ここで孟浩然是口を挟んでみたくなる。妹がそれに気付き、

「お兄様、話の腰をいちいち折りませんように。お兄様ほど自分のことがわかっていない人はいないと、二十二郎さんが言おうとしているのは、正しいです。南園老に特別に可愛がられて、生まれながらに誰よりも恵まれていながら、そこから逃げるようなことばかりして来たでしょう。自分勝手に、それでいて、憎まれたりしないのですから不思議な人です」。

孟浩然はただ苦笑して何も言わずにおく。

口を挟みたくなつたのは、自分を弁護するためではなく、「天下を塞いでいた悪しき匂い」を孟邕がどのように捉えているのか尋ねてみたくなつたからだ。「悪しき匂い」は則天武后の統治を指すのだろう。則天武后は、敵と見なした者を必ず罪に落した。褚遂良が追放されて褚先生の人生は大きく狂い、張野人は最後まで事実を語らなかつたが、当時苛烈を極めた拷問を受けたのだろう。南園老は、則天武后が皇帝になつて国号を周に改めたのに対し「唐の世にはもう戻らぬのか。我が曾孫の誰かがそれを為す仕事をしてはくれまいか」と言い残して死んだ。魏元忠は、則天武后に対して物を言つて死刑に

なりかけ、若い孟浩然は魏元忠に続かなければならないと考えた。

現在の都には、浸っている者にとつて心地よい一種特有の匂いが充満しつつあるようだ。空前の繁栄の余沢であろう、新たな門閥が形成されつつある。皇帝と個人的な結び付きを強めた者が皇帝を取り囲み、互いに争いつつも、自分たちの利益を損なう者は一致して排除する。学問を積んだ貢挙出身者は朝政改革を唱えたりしがちであるから、手なずけにくそうな者は試験で落とし、すでに朝廷に入り込んでしまった者は策略をもって駆逐する。かくて韓朝宗は左遷され、張九齡は失脚させられた。

則天武后が褚一族を追放したのには当時の門閥を打破する意味合いがあり、則天武后は貢挙の制度を整備し、無位無官の魏元忠をいきなり重要な職に就けました。八十歳を超えた張柬之を襄陽から呼び寄せて宰相に据えたのも則天武后ならではの英断で、張柬之は期待以上の働きで、則天武后を皇帝の座から引きずり降ろした。

孟邕は、

「姉さんのおっしゃる通りです。南園老しかり、楮先生しかり、雲表門主様しかりで、いろいろな方々に思いつきり可愛がられてすな、書と剣を学んですくすくとまともな人に育って行くかと思いきや、突然、一生娶らぬと宣言してみたり、青巖庵で竹林の七賢人を気取ってみたり、あるいは、頭のおかしな漁夫に誘われて鹿門山に登ってみたりと、妙なことをいろいろしたあげくに、書からも剣からも逃げるようにして鹿門寺に籠ったのであります。これが御年二十三歳のとき、南園を出た第一回です。このときは、とにかく最初でしたから、反対する声が随分とあつて、ちよつとした騒動になりました。あからさまに賛成を表明したのはこともあろうにうちの親父さんだけでしたな」。

孟郊は首を傾げ、

「私は十歳にもなっていないなかったので、まだ何もわかっていなかったのですが、学舎では、貢挙から逃れられてうらやましいというような受け止め方もあったように記憶しています。勿論そのうち必ず戻って来て貢挙を受けるに

違いないと考える人の方が多かったですのですが、叔父上は、あのころ貢挙についてはどうのようにお考えだったのでしょうか。

孟浩然は妹の顔を見て、

「私が口をきいてもいいのかい」。

「都合の悪いことには、ぜひお答えして下さい」。

「弁解するのではないが、書からも剣からも貢挙からも逃げる意図はなかった。鹿門山に入りたい一心だった。張八君と貢挙のための勉強をするというのを鹿門寺に籠る口実にしたくらいだから、貢挙を受ける気は十分にあった。ただ、四郎兄さんより先に合格することは避けなければと考えていた」。

孟四を思うと胸が痛む。

孟四の死に、自分の二度目の上京が関係していなかったとは言えない。自分の行動が孟四を徐々に追い込んだのなら、孟四の犠牲の上に自分があるのではないのか。

妹は、兄の心中を察したのか、即座に転じて、

「お兄様は詩のために鹿門寺に籠ったのでしよう。詩が何よりも大切なのですから」。

「鹿門寺に籠った当初は、張八君と一緒にだというのが最も大きかったように思う。張八君がいなかったら、叔父上の応援があっても反対の声は止まなかつただろうし、鹿門寺に入ったかも疑わしい」。

子壺は、

「張子容様はそれほど大きな存在だったのでしょうか」。

「いまもだ。あのころに張八君に何を求めていたのかというと、たぶん、亡くなった姉さんの代わりだったのだろう。それに、おまえの分もあったかも知れない」。

「あたしですか。急におかしなことを言わないで下さい。張八様は立派なお方ですから、お姉様の代わりをお求めになるのもわからなくはありませんが、どうしてあたしまで入るのですか」。

「姉さんとおまえと三人で一緒にいたところが最も楽しかった。それとほぼ同

じものを張八君は与えてくれた。鹿門寺ですつとその中に浸っていたかった。「つまりそれは張子容様に甘えていたのですか。お兄様ったら子どものような。人はついお兄様を甘やかしてしまうのです」。

「張野人のおじさまだつてそうだったのでしよう」。

と、孟郊が言つと、孟篋も、

「うちの親父さんもそうなのですな」。

「張八君は、私のことがわかつていて、突き放してくれた。鹿門寺で一人になつて、ようやく本氣になつて詩に打ち込むようになった」。

「それにしても、どうしてうちの親父さんだったのですかな。鹿門山に詩の巧みな若者がいるということがぼちぼち知れるようになったところに、こちらのお父様が亡くなつて南園に帰り、喪が明けたばかりの秋のこと、選ぶに事欠き、うちの親父さんを引つ張り出して万山に登つたのが運の尽きだったのでありますよな、それで第二回目と相成つたのであります」。

「やはり、他の人と違つて叔父上だけが鹿門寺に籠るのに賛同して下さつた

からだろう」。

「当時の僕はいたって真面目でして、うちの親父さんのようになってはおしまいだと思っていましたから、健気にも貢挙の勉強に一心不乱に取り組まなければいけないと考えていました。それで親父さんが勲賞する六郎兄さんの真似など断じてしてはいけなないと心に決め、悪い見本の六郎兄さんとは反対のことをしようと、六郎兄さんのことを観察していました。張野人のおじさんの小屋にも探りを入れると、おじさんは新しい艫を拵え始めたので、これ何かあると疑って、『それは何のためですか』と尋ねますと、『旅の途中で折れでもしては一大事ですからな』と答えたので、これは見逃してはならぬと思いました」。

「割り込んですまないが、君はあのころすでに叔父貴の小屋に出入りしていたのかい。それはちっとも知らなかった」。

「兄上が知らないのは当然です。張野人のおじさんの小屋に行くのは、僕のようにお勉強熱心な良い子には御法度でした。禁を犯すには、まずは六郎兄

さんにも知れないようにしなければなりません。

孟郊が嘔き出し、

「誰が良い子なものですか。とめどないおしゃべりで先生に叱られてばかりの悪童だったから、張野人のおじさんにも気に入られたのでしよう」。

「初めて君を叔父貴の小屋に連れて行ったとき、神妙な顔で挨拶していたではないか。叔父貴だってそうだった。二人ともひどいものだ。叔父貴が新しい艀を作っていたとは初めて聞いた。洞庭湖に行こうとしたとき、叔父貴は渋々だった」。

「艀が新品であるのに気付かなかったのですか」。

「張説様にお会いすることで頭が一杯だったのだろう」。

「艀だけでなく、あの朝、僕が後ろから付けていたのも、全くおわかりでなかったです」。

「それは本当かい」。

「米やら何やら隠れて持ち出したりしていれば、すぐにわかります。あの朝

に出て行かれると睨んだのはその通でしたが、大失敗だったのは、舟が出る瞬間に飛び乗らなかったことです。もしも僕があそこで舟に乗り込もうとしたら、どうしましたか、突き落としましたか」。

「いまの君ならそうするだろう。まだ子供だった君にはどうしただろうか。あのころの孟邕をあまり覚えていない。孟邕に限らず、ごく身近な幾人かを除くと、当時の南園の人々の記憶はぼんやりしている。目に入っていないなかったのだろうか。」

「六郎兄さんにしがみついて岳州にまで行ったなら、岳陽楼でのあの詩を、僕が止めてさしあげられたかも知れません。張野人のおじさんは、結局は兄上には甘くて止めなかったものだから、その後の三回、四回を数えることになってしまったのでしよう」。

「あの詩は君に止めてもらわなければいけないようなものだったのかい」。
「だって、あの詩がなければ、お兄様はずっと鹿門山の隠士でいられたのでしよう」。

妹が言うと、孟邕は、

「張野人のおじさんが新しい艀をせつせとこしらえていたのは、半ばは期待に反すると思いつつも、兄上との楽しい旅を思い描いてのことだったのではありませんか」。

「張説様にお目にかかるために陸に上がったとき、叔父貴は私の背に『斉に久しきは我が志にあらざるなり』とつぶやかれた」。

「それは孟子の言葉ですか」。

「すぐにわかるのは、おまえもやはり孟家の娘だな」。

「お褒めにあずかりまして。これでも、お姉様には、お勉強も厳しく仕込んでいただきましたから」。

「孟子のこの言葉に、私の一生も凝縮されるようになると、早くも叔父貴は見ていたのだろうか」。

「もう一生のまとめですか。そう先走られては話が終わってしまいますな」。

「あのとときに張説様に釣り上げられていただけたらよかったです、お兄様はい

までもお考えでしようか」。

「そうであれば、今日のこの私はない。いまここで昔に遡って、釣り上げられていたらよかったのかと考えることはできない」。

「それは、つまり、釣り上げられなくてよかったと、いまは考えているということなのでしょう」。

孟郊は、

「叔父上のあの詩には、釣り上げられるのを望む魚と、自由に泳ぐのを望む魚と、両方がいたのではありませんか。よかったかよくなかったか、二つに一つの答えはできないのではないかと思えます」。

「あそこで魚なぞを持ち出さずに、洞庭湖の風光を純粹に詠んでいたならば、張説様は直ちに釣り上げて下さったのではありませんかな」。

「詩の後半を私が詠むに至って、張説様の言葉付きが変わった。私は釣り上げてはいただけず、自由に泳ぐ魚でもなくなり、従って病むより他はなかったというのが、要するに二度目の顛末で、次の三度目が、郊君と廬山を見に

行った旅であつた」。

孟浩然は強引に話を先に進める。病で倒れたところの心情を思い出すのは今でも辛い。孟邕にもその気分がわかつたのだらう、すぐに話を引き取り、

「いまのこの主殿が旅に出たあのころは、南園にとって、ほんのひとつきの安らぎの時期だつたですな。もつと長く続くと思つていたのに、意外にも、短いものだつたですが」。

「私は続かないと思つていました。まだ十五、六で、本当のところは何もわかつていないくせに、父に反発してばかりしていました。父があのように、南園はどうせすぐに駄目になるに決まつていふと思つていました。南園一の大きな体を無理に縮め、ひたすら皆の機嫌を取つて歩き回る父が情けなく、腹立たしくもありました。廬山を見て南園の将来を真剣に考えました。でも、私がちよつと考えたくらいでは、南園はどうすることもできません。駄目になるとわかつていながらどうして止められないのか、今度は自分が情けなく、腹立たしくもありました」。

「君はまことに素直な人ですな。事は単純に起こるのではない。だから、四度目となった。君も張野人のおじさんも止めたけれども、思いもよらぬ駆け落ちとなつてしまったのですな」。

「へえ、あれは駆け落ちだったのですか。お兄様にも色っぽい話があつたのですか」。

「あればいいと、姉さんも思いますでしょう。しかし、残念ながら、六郎兄さんはその点では実に詰まらない人で、都の美しくも妖しい美女にさえわずかに心を動かすことすらありませんでした」。

「そうですね。だって、お兄様が恋した相手は、誰も適わない一人だけだったのですもの」。

「そのような人が私にあつただろうか」。

「ありましてでしょう。お姉様がお亡くなりになって、誰とも結婚する気がなくなつたのでしょう。お姉様の代わりを張八様にお求めになつたと、御自分でおっしゃつたではありませんか」。

「姉さんは一郎兄さんの妻ではないか。ここにその息子がいるというのに。」

孟郊は、

「叔父上はきつとそうだったのだろうと、昔から思っていました。」

「皆で何を言うのかい。姉さんの才を惜しむ気持ちはいまも強い。それだけだ。私などより、ずっと優れた詩を詠まれたに違いないのだから。」

孟浩然はやや気色ばんで言う。

「そのような訳で、六郎兄さんの駆け落ちの相手は女性ではなく、詩でありました。駆け落ちの後見人は不肖この僕でありましたが、張野人のおじさんの代わりが務まるのか、正直かなり緊張しましたな。」

「へえ、兄さんでも緊張するのですか。」

「駆け落ちはしても、心中まではさせずに生かして南園に連れ帰らねばなりませんからな。それには、尋常でない苦労があったのです。」

「君がいなければ、甘蔗を啜えたまま、都で飢え死にしていたかも知れない。」

「それは心中よりも詰まらない。僕がいたからこそ、兄上は無事に帰還し、

次の五回目もあり得たのですな」。

妹は、

「長い旅のことは全てすつと飛ばして、もう次なのですか」。

「いろいろありすぎましたからな」。

孟郊は、

「一つだけ言わせて下さい。叔父上が帰って来られて、あの日、南園中堂の前でお会いしたとき、叔父上がとてつもなく大きく見えました。私は、父ができなかったことをしてみせると、心に強く決めていました。そのためには何としてでも闘い抜く気でした。叔父上を見た途端に、それはいかにも馬鹿らしい思い込みだったと知りました」。

「ほう、あのときに、僕は後ろから、君が六郎兄さんの胸に跳び込むのを見ていましたが、君はそう感じていたのですか」。

「旅の間に、叔父上はどのようにして変わられたのですか」。

「私が変わったのかどうか、私にはわからない」。

「兄さんは、この詩も覚えていますでしょう」。

孟郊は孟邕に向かつて、旅の間に孟浩然が詠んだ詩を唱える。

義公習禪処 義公殿が禪を習うここは

結構依空林 からりと開けた林に寄り添う建物。

戸外一峰秀 戸の外に一つの峰が高く突き出し

階前群壑深 階の前から谷が深く落ちていきます。

夕陽照雨足 遠くで雨脚が夕陽に照らされすと

空翠落庭陰 山の緑がふつと庭の片隅に落ちます。

看取蓮華浄 そのときに蓮華の浄らかさが見てとれて

応知不染心 何ものにも染まらない心が知れます。

「もちろん僕は六郎兄さんの詩を完璧に記憶しています。それは、会稽で大禹寺を訪ねたときの詩ですな」。

「そのとき叔父上はどのようであったのでしょうか。叔父上は旅の間に心の鍛錬を余程なされたのではありませんか。莫淵さんの剣の話を先ほどしまし

た。叔父上が雲表観主様の剣を伝えたというよりは、叔父上の心の在りよう
を莫淵さんに伝授されたのではないでしょう。私はそのように理解してい
ます。莫淵さんはそれを受け止め、あちらで活かしておられるのではありま
せんか。いまのこの詩は唱えるだけで心が落ち着きます。『蓮華の浄らかさ』
は、叔父上のお心そのままだったのではありませんか。

「大禹寺で禅を習っておられた義公殿のお心を詠んだままで、私ではない」。
「義公殿のお心がおわかりになったのは、叔父上のお心も同等のところにあ
ったからではありませんか。大禹寺で叔父上がどのようにされていたのか、
兄さんは覚えていますか」。

「あのころは旅から旅で、云稽の大禹寺だったか、天台山の桐柏観だったか、
どこで何があったか、いまとなつては全体に模糊とした記憶となつてしまつ
ていますな。細かいことはともかくとして、郊君は六郎兄さんの信奉者にな
つてしまつているようなので、敢えて水をさすとすな、旅の間、六郎兄さ
んを近くでずっと見ていた僕としては、いつも齒がゆい思いをしていたと申

し上げておきたいです。決して突き抜けようとしないのでですから」。

「ほう、それはどういうことなのかい」。

「官職を得ようと都に出たのでしよう。張均様や幾人かの方に、齒の浮くような詩を差し出して、これはついに本気になったと思いました。蔑まれようが、手を汚そうが、一步も退かない気なのだろうと期待して見ていましたら、詩だけで終わりでした」。

「私にはせいぜいあそこまでだった」。

「あそこで突き抜けていたら違ったのではありませんかな。大禹寺でも同様です。あのような詩を詠むのだったら、義公殿と同じところまで行き着こうとすべきではないのですか。詩と駆け落ちしながら、郷里から一通の手紙が届くとあつさり切り上げてしまいましたし」。

「帰るよう仕向けたのは、君ではなかったのかい」。

「兄上の心を慮らずにはいられませんでしたからな。僕も甘いのです。それに、郊君のことも思わない訳にはいきません」。

「叔父上が都に出られる前に、南園のことは任せて下さいと、私は申しました。旅を始められたからには、南園のことはお忘れになって、旅を続けていただけなかったのです。しかし、それでも叔父上のお心をお尋ねしないではいられませんでした」。

「南園から逃れるような旅で、南園なくして私は存在し得ないと知った。張八君もそのように教えてくれた。襄陽に帰り、中堂で君と会うまでの間に、南園あつてこそその自分であると知った。郁殿に言われて詠んだ詩は、それ以前の詩とは違った。あれは南園が詠ませてくれた詩だ。しかし、それではまだ不十分だ。そこからさらに突き抜けなければいけない。だから五度目がなくてはならなかった」。

「二度目の上京は、さすがの僕も意表を衝かれました。どうしてあの時期に都なのかわからなかったのです。しかし、さすがに姉さんは見抜いていたのですな。兄妹の情には適いません」。

妹は微笑み、

「だってお兄様のことはこのあたしが一番よくわかっていのですから。ただ、李白様への嫉妬でしようと思したのは、手厳しすぎたかもわかりません」。「李白君が襄陽に來られなければ、南園にいましばらくは安住していただろう。都には行ったものの、君たちが見ての通り、詩はいまも滞ったままで。二度目の上京で一つよかったと思えるのは、陶淵明が以前よりも幾分かわかるようになったということであろうか。最初の上京の前に、二十二郎君は、順序として陶淵明の逆をするのかと言った。郊君と廬山を見て、私はそれなりに陶淵明を理解した気になっていた。いまもまだわずかしかわかっていない」。

孟浩然は一篇の詩を吟じる。

払衣何処去　衣を払って何処に行くのかといいますと

高枕南山南　枕を高くして岷山の南で寝転がろうというのです。

欲徇五斗祿　陶淵明と同じく、五斗の祿米のために我慢して仕官しよ

うとしても

其如七不堪

嵇康と同じく、七つの堪えられないことはどうにもなりません。

早朝非晚起

早朝などはとんでもなく、遅く起きるのでありますし

束帯異抽簪

束帯などは勘弁で、冠をはずしてざんばら髪です。

因向智者説

というわけで、隱棲の智者の説くのを聞いて

游魚思旧潭

かつて泳いでいた池を思う魚の心に従うのであります。

「二度目の上京の後、張淮（ちょう わい）さんにこの詩を贈った。張さんも都で思うようにならず故郷に帰った。張さんはいかにもいまの都に合いそうにない人で、私ができるように思う以上に、張さんは私をそのように思ったであらう。それでも私には、孟子の子孫として生まれ、褚先生の教えを受けたからには、天下の民のために何かしなければならぬとの志があった。陶淵明の祖父は晋朝の大官で、祖父のような大きな仕事をしたと考えていた。己の本性が官人に向かないのを知っていながら、官職を得ようと陶淵明は努めた。ようやく官職を得ると、たちまち投げ捨てて郷里に帰った。そうしなけ

れば、陶淵明の園田の詩は生まれなかった。私は陶淵明の迹をなぞるのではない。それでも、陶淵明いてくれたお蔭で、自分の行くべきさらなる前へと歩み出せる。だから、自分もおも前へと歩みたい」。

孟浩然はここでもう一つ自分の詩を吟じる。

仙穴逢羽人

仙人の棲む穴で羽人とも言うべき君に逢うために

停艫向前拜

舟を泊めて、挨拶に参りました。

問余涉風水

私に風や水をどのように涉って

何処遠行邁

遠くどこを旅して来たのかと問われました。

登陸尋天台

こうして陸に登って天台山を尋ね

順流下呉会

流れを下って呉の会稽に参ろうと思っています。

茲山夙所尚

この山は昔から尚ぶとありますから

安得問靈怪

靈怪について問いたいものです。

上通青天高

上は青天の高きに通じ

俯臨蒼海大

下は蒼海の大なるを臨み

鶏鳴見日出

鶏が鳴いて日の出るのが見えると

毎与神仙会

いつも神仙がここに集まり

往来赤城中

赤城の中を往来し

逍遥白雲外

白雲の外を逍遥します。

苒苒異人間

人間の世界とは異なる苔が生え

瀑布当空界

滝が空なる世界にかかっています。

福庭長自然

仙界はとこしえのこのままであり

華頂旧称最

華頂はもとより最も高くつき出ています。

氷比従之游

永久に君に従って遊ぶならば

何当济所届

どのような境地に至るでしょうか。

「天台山である道士に贈った詩だ。この泰平の世に巡り遭いながら仙界を目指す者がいる。嵯康を任じていた顔五君は、青巖庵から旅立ったまま帰らない。顔五君と同じ道を歩みたいとの思いが私にもあった。自分に残された時間が多くはないのを思うならば、顔五君と同じ道も一度は歩んでおかなければ

ばならない。それで蜀を目指した旅に出た。それが六度目だ」。

妹は、

「あれは、さすがのあたしも想像外で驚かされました。李白様がいらしたときに、峨眉山に顔という姓の隠者がいたとかいなかったとか、そんな話を聞いたのが旅のきっかけとしてあったのでしよう。体調がすぐれないのに無茶にもほどがあります」。

「行く気になった以上は行ってみるしかなかない」。

「要するに毎回それではありませんか。一体どうして行ってみたくなったりするのですか」。

「興なのだろう」。

「詩が生まれるのも興、旅に出るのも興。興とは一体何なのですか」。

「どこから来て、それが何であるかわからないから興と言う。興に誘われて蜀へと旅立ち、三峽に至って興が尽きたから帰った。ここを経て峨眉山に向かった顔五君の心がありありと知れた。ちょうど体の調子もそこまでだっ

た」。

「それです。嫌な言い方をするようですが、お兄様はもう旅に出られるお体ではないのです」。

「この次は張八君と同じ道を歩んでおきたい。それで全て終わりになるだろう」。

「これまでも、張子容様と御一緒に勉強して、同じ道を歩もうとされていただけではありませんか」。

「私も含めて我々南園の者は、南園老の言葉を長らく曲解していた。我々の誰かが貢挙に合格して官人になることで、南園はかつての繁栄を取り戻せると、我々は考えていた。南園老はそのようなことを言ったのだろうか。南園老が、楮先生をお招きして学舎を建てたのは、孟子の理想に一步でも近づくためではなかったのか。世に南園の繁栄を押し広めて、天下がさらに繁栄することで、南園の繁栄が続くと、南園老は言ったのではなかったのか。順序が違う。だから張八君と同じ道を歩んだことはまだない。この前、江南の地

で、張八君と会ってよくわかった」。

孟郊は、

「南園の繁栄を世の中に押し広めるとするのは、一つの考え方としてはあるのかも知れませんが。でも、いまの世において、何らかの支えなくしては南園が繁栄するのは難しいのではないのでしょうか。官職というものが大きな支えになるのは否定できないと思います」。

「孟子より五百年を四つ重ねた昔の聖天子のころの民衆は天子の存在すら知らずに泰平を謳歌できた。孟子から五百年余を経た陶淵明のころは、園田に帰れば、王朝の支配は及んではいても、なお遠い存在であると思うことができた。それから五百年後のいまはどうなのか。我等が耕す田は、お上が一人一人に配って与えて下さるものだ。都で起こっていることが我等の暮らしにすぐに響く。官職があれば何にも勝る大きな支えになる。南園老は、唐の律令より千年も前から孟子の教えはあつたとよく言っていた。陶淵明が耕していたのはお上が配って与えてくれた田ではなかった。我等の先祖も然りだ。」

隋の時代まで、南朝と北朝の二つに分裂していた。ここ襄陽は、時には北朝の支配が及ぶことがあっても、おおむね南朝の側にあった。お上が一人一人に田を配る仕組みは北朝が始めた。この南園の本来の繁栄を思うとき、あるいは、孟子の教えを思うとき、そのことに突き当たらざるを得ない」。

孟邕は、ほうと口を鳴らし、

「兄上、危ないところに来ましたぞ。それも突き抜けるということですかな」。

孟浩然は唐突に話を転じ、

「で、君は何を企んでいるのかい。私の勘定はこの前の蜀への旅に至って終わったのだから、それを聞こうではないか」。

「僕ですか。僕は何か企んでいましたっけ」。

「兄さん、誤魔化さずに、こちらで白状してしまった方がいいではありませんか」。

と、孟郊は孟邕の背をつつく。

「僕は五十年來の南園の悲願をついに達成させようと思っているだけです」。

六郎兄さんは、曲解と言われましたが」。

妹は、

「貢奉を受けるのなら、別にあたしは叱りませんけれど」。

「受けません。六郎兄さんとそっくり同じことをします。僕は、兄上と違つて突き抜けて、必ず成果を持ち帰ります。要領は全てわかっています」。

「叔父上にできなくて、兄さんにできるはずないでしょう」。

「六郎兄さんの従弟であることを武器として、臆面もなく要路の人々にしがみつくのです。自信があります」。

「叔父上のような立派な詩が書ける訳でもないのに。さっきだって、兄さんは自分の詩を詠めなかったではないですか」。

「詩でうまくやってやろうとしても所詮うまくいきません。孟子の教えはもつと駄目ですな。都に行つてよくわかったのは、いま最も大事なものはさしずめ二つだということです。縁故と利です。縁故があれば力が得られ、力があれば利が得られます。利のあるところに縁故が生まれます。縁故と利が絡み

合い、いまをときめくお歴々は皆それです。僕にはそこに入り込める目算がありません。任せて下さい」。

孟篁の後ろ髪を孟郊は引つ張り、

「兄さんのこの頭はどうかなってしまつたのです。いよいよ叔母上にこつぴどく叱っていただかなければなりません」。

妹は笑い、

「この二人は、どうせあたしが何を言っても聴く耳持たずです。無駄な意見をするより、この部屋に外から錠をして、どこにも行けないように閉じ込めておくしかないでしょう」。

「閉じ込めるのは六郎兄さんお一人にしていただきましよう。これまで勘定してですな、六郎兄さんが旅に出て、南園のために何か実を結んだものがあったでしょうか。それに比べて、僕はこれからです。荊州には都を追われて力を失った人がいて、都には現に力を持っている人たちがいるのですから、どちらに行くべきかは明らかでしょう」。

「この兄さんには呆れます。ようやく魂胆がわかりました。叔父上と荊州に行きたいでしょう。そのためにわざと正反対のことを言っているのです。う」。

「正反対か。僕は都の権力者に思いつきり擦り寄る計画。その正反対なら、荊州で唐朝をひっくり返す狼煙を上げる。実に結構ですな」。

「叔父上がそのようなことを考えるはずないでしょう」。

「六郎兄さんがさっき言ったのを聞かなかったのですか。かつてはお上が土地を配るようなことはなかったと。南園の数百年の歴史を顧みて、我らが耕す土地は我等自身が開拓したものだっただけではありませんか。元来あるべきそのような世の中に戻すのがいいのなら、唐朝を倒したらいい」。

孟郊はまた孟邕の後頭部を叩き、

「この兄さんの頭は壊れてしまいました」。

妹は、

「人様に聞かれたらどうするのです。張九齡様は忠義のお方と聞きます。荊

州で狼煙を上げるなど、これっばかりも考えたりするものですか」。

「朝廷を追われたのですから、それくらい勢いよくやってもらいたいものですな」。

孟浩然は、

「都には懸念すべき動きがある。しかし、この泰平が続くのが民にとって何よりであるのは間違いない」。

「だったら、兄上は南園にいて、これからは僕に任せて下さい」。

「張八君は二十五年にわたって地方での実践に努めて来た。私も同じ道を一度は歩きたい。張九齡様が私に声を掛けて下さったのは、私が地方の実情を知るとお考えだからであろう」。

「お兄様はすでにいろいろなことをされました。そのお体で無理をされなくても、もう十分ではありませんか」。

「私は南園に生まれて浩然の名を授かった。天地間には浩然の気が充塞し、心の内に浩然の気を養うならば、千万人の敵があるとも道は貫けると孟子は

言った。私はいかにも非力だ。その上、この体だ。それでも、孟子の言葉を
思わずにはいられない。かつて、張説様が岳州にいらしたところに、新しい詩
を生み出そうとする機運が澎湃として天下に湧き出した。それと同様に、張
九齡様が荊州にいらしたことから、新しいうねりが湧き立つのを期待したい。
「孟子の子孫はお兄様一人ではありません。お兄様は詩を詠むお方なのです。
詩だけで十分です。荊州に行ったら寿命を縮めます。南園でこれから詠める
はずの詩が失われてしまいます。どうかおやめ下さい」。

孟浩然はふっとつぶやく。

久於齊　　齊に久しくいたのは

非我志也　　私の最初からの志ではありませんでした。

深いその響きに、妹は嘆息し、

「意は得ないと知っているからこそ行かれるのですか」。

孟郊も嘆息し、

「叔父上を止めることは、これまでと同じ、できないのでしょうか。でしたら、

こちらの兄さんをお連れ下さい。この兄さんを都に行かせないためにもそうして下さい」。

「二十二郎君をさんざん連れ回して来た。今度は、郁殿に頼んでみてもいいかと思っている。荊州から揚州にも行つてみたいとも考えている。江南にも行き、張八君にも会うつもりだ」。

「そのような長旅になると聞いては、絶対に行かせる訳にはいきません」。

「あれこれ勘案しますと、やはり僕が行くしかないでしょうな。我が意志を曲げてもです。仕方ありません。郁殿のところにも有能な者はいるでしょうけれど、六郎兄さんの面倒を長く見られるのは、どこを探して、この広い天下に僕一人しかいませんでしょう。都で官人になるのを諦めてでも、兄上と旅に出るしかないでしょうな」。

「兄さんは、最初からそのつもりだったのでしよう。叔父上は、孟子の子孫として、敢えて困難なことをなさらずにはいられないのです。叔父上のために、せいぜい努めて下さい」。

「思うに、孟子と同じくらいに、あるいはそれ以上に、千年にわたる我等の先祖も立派だった。その人たちが、脈々とこの地を耕し、脈々と孟子の教えを我等にまで伝えてくれた。真に尊いのは無名の人々ではなからうか。孟子に次のような言葉があった。」

民為貴

民こそが貴くて

社稷次之

土地の神、穀物の神がそれに次ぎます。

君為輕

君主はそれより軽いのです。

是故得乎丘民而為天子

だから民衆に信じられた者が天子のなるので
す。

得乎天子為諸侯

天子に信じられた者はその下の諸侯になり

得乎諸侯為大夫

諸侯に信じられた者はその下の大夫になるだ
けです。

「土地の神や穀物の神でさえも民に次ぐ。まして天子はどうなのか。南園において同じだ。主人が人々を動かすのではない。人々の信を得た者が主人

になる。荊州に行くとは南園で詠めるはずの詩が減ってしまつと、おまえは心配してくれた。詩だけで十分ではないかとおまえは言う。その詩のためにも、もう一步前に踏み出さなければならぬ。南園があるから私の詩がある。荊州の地においても、民の信を私が得られるようなことがあれば、突き抜けることが一つできるように思う」。

「あたしは許しません。でも、もういいことにします。あれこれ言わなくて結構です。止めません。でも、今回だけです。八度目はどのようなことがあつても行かせません。それをお約束して下さるのなら、見逃してさしあげます」。

孟浩然是小さくうなづく。

旅へと誘う興がまたしても来たのは、本意を遂げたことがこれまでになかったからだろうか。七度目だけが例外にはなるまい。荊州には長く留まれないだろう。来年の春には揚州に行くだろう。揚州は春が最も美しい。

冬は狩りの季節だ。張九齡は荊州の長官として盛大に狩りを催すだろう。

幕客として自分もそこに加わるだろう。張九齡は当然のこととして、狩りの情景を詩に詠むよう自分に所望するだろう。張九齡の幕府において自分に期待されるものは何か。自分には孟子の子孫としての志があっても、自分はいくまでも詩を詠む者、「狂歌の客」なのであろう。

何意狂歌客　狂歌をなすこの私は何を思つて

従公亦在旃　張公に従つて赤い旗のもとにあるのでしょうか。

このように詩に詠むとわかつていても行く。

浩然の気が天地間に充満するのを信じる。一筋の道を一步でも先へと進みたい。

■越中逢天台太一子

開元十八（七三〇）年に天台山に登り、道士の太一子に逢つた際の詩。

仙穴逢羽人　仙人の棲む穴で羽人とも言うべき君に逢うために

停艫向前拝

舟を泊めて、挨拶に参りました。

問余涉風水

私に風や水をどのように涉って

何処遠行邁

遠くどこを旅して来たのかと問われました。

登陸尋天台

こうして陸に登って天台山を尋ね

順流下呉会

流れを下って呉の会稽に参ろうと思っています。

茲山夙所尚

この山は昔から尚ぶところでありますから

安得問靈怪

靈怪について問いたいものです。

上通青天高

上は青天の高きに通じ

俯臨蒼海大

下は蒼海の大なるを臨み

鷄鳴見日出

鷄が鳴いて日の出るのが見えると

每与神仙会

いつも神仙がここに集まり

往来赤城中

赤城の中を往来し

逍遙白雲外

白雲の外を逍遙します。

莓苔異人間

人間の世界とは異なる苔が生え

瀑布当空界
福庭長自然
華頂旧称最
水比従之游
何当济所届

滝が空なる世界にかかっています。
仙界はとこしえのこのままであり
華頂はもとより最も高くつき出ています。
永久に君に従って遊ぶならば
どのような境地に至るでしょうか。

■ 登総持寺浮図

開元二十二年（七三四）年、二度目の上京の際に、長安にある莊嚴寺の塔に登った詩。

半空躋宝塔
時望尽京華
竹遶渭川遍
山連上苑斜
四郊開帝宅

空にそびえる宝塔に昇りますと
都の繁華がことごとく見えます。
渭川に沿って竹林がめぐり
上林苑は斜めに山へと連なります。
四方に開けたここに帝王の居場所が置かれ

行陌逗人家

八方に続く道より人がここに集まります。

累劫従初地

永遠の時も最初の修行から始まるのですから

為童憶聚沙

幼童が沙を集めて塔を作った昔の故事を憶います。

一窺功德見

功德があるのを一度でも見ると

弥益道心加

いよいよ道心が増します。

坐覚諸天近

かくて仏教の説く六天が近くにあるのを覚え

空香逐落花

空中の香りが落花を逐います。

留別王侍御

開元二十二年(七三四)年、都を去る際して王維に残した詩。

寂寂竟何待

この寂寂とした思いは何を待つのでしょうか

朝朝空自歸

朝に朝に空しく過ごしただけで帰ることとなりました。

欲尋芳草去

芳しい草を尋ねるために去るにしても

惜與故人違

親しい方々と別々になるのは惜しまれます。

当路誰相假 当路の方々は互いに倚りあうようですが
知音世所稀 本当に知る仲間は世に稀です。
祇応守索寞 これからはただ静寂を守るつもりで
還掩故園扉 故園に帰りましたならば扉を掩います。

■南帰阻雪

開元二十二(七三四)年、都から襄陽に帰る途中、宛や許の地のあたり
で雪に阻まれての詩。

我行滞宛許 私の旅は宛許の地で滞り
日夕望京予 日に夕に長安や洛陽の方角を見えています。
曠野莽茫茫 茫茫として広がる曠野のうちの
郷山在何処 どこに故郷の山があるのでしょうか。
孤烟村際起 一筋の煙は村はずれに昇り
帰雁天辺去 南に帰る雁が天の果てへと去ります。

積雪覆平皋

積雪が大地を覆ういま

飢鷹捉寒兔

飢えた鷹が兔を狙っています。

少年弄文墨

私は少年のころより文墨を弄び

属意在章句

意を尽くすのは詩賦でありました。

十上恥還家

天下のためとの志がありながら家に還るを恥じて

徘徊守歸路

帰路の途中でなお徘徊し続けるのです。

■ 入峡寄舎弟

蜀への入り口である三峽に入つて、弟の孟洗然に寄せた詩。長江が深い溪を刻む三峽は、古の聖人である禹が洪水を防ぐためにうがつたものだという。

吾昔与爾輩

私は昔は君たちとともに

読書常閉門

常に門を閉ざして書物を学んでいました。

未嘗冒湍險

いまだかつて早瀬の危険を冒したこともなく、

豈顧垂堂言

自此歷江湖

辛勤難具論

往來行旅弊

開鑿禹功存

壁直千巖峻

淙流萬壑奔

我來凡幾宿

無夕不聞猿

浦上思歸恋

舟中失夢魂

淚霑明月峽

心斷鵲鴿原

離闊星難聚

世の人の謗りを受けることもありませんでした。

江湖の風波の中を経巡りますと

辛勤はつぶさには論じ難いものがあります。

旅と人生に疲れたとき

山を開き水路を鑿った禹の功績を思います。

壁は直立して、急峻な千の巖があり

滝は流れ落ちて、万の谷を奔ります。

三峽に入って私は幾つ宿りを重ねたでしょうか

悲しげな猿の声を聞かない夕はありません。

水の上に故郷を恋しく思い

舟の中で夢に魂は帰り去ります。

名月峽で涙に濡れて

兄弟睦む鵲鴿の原を思います。

離れ離れになつて星は集まり難く

秋深露已繁

秋は深く露はすでに繁く降ります。

因君下南楚

君を想って襄陽に下すこの手紙で

書此示郷園

私の心を南園の人々に示すのです。

■ 従張丞相游紀南城獵戲贈裴迥張參軍

開元二十五（七三七）年の暮れに張九齡が紀南城のあたりで獵を催した

のに同行して詩を詠み、裴迥と張氏に贈った。題に「戯れに贈る」と

あるのは、孟浩然の微妙な心理の反映であろうか。

従禽非吾樂

鳥や獸を追うのは私の樂しむところではなく

不好雲夢田

ここ雲夢の沢での獵を好みません。

歲暮登城望

歳の暮れに城に登って遠望しますと

偏令郷思懸

もっぱら郷里が思えてなりません。

公卿有幾幾

ここにはお偉い方々がたくさんにおられ

車騎何翩翩

その車や馬がひっきりなしに行き交い

世禄金張貴
官曹幕府連
順時行殺氣
飛刃争割鮮
十里届賓館
徵声匝伎筵
高標迴落日
平楚散芳烟
何意狂歌客
従公亦在旃

世々禄を食む高貴な人々がお勤めになる
官署が幕府の建物に連なっています。
いま季節はまさに猟をするによい時で
とれた獲物は刀を飛ばして争って裂かれ
十里を駆けて賓館に届けられ
音楽の奏でられる宴席を肉が巡るうち
日は高い樹の上を回って落ちかかり
遠く広がる林は芳しい靄が漂います。
狂歌をなすこの私は何を思つて
張公に従つて赤い旗のもとにあるのでしょうか。